教外俗文娘消息

四編 上

208
12
684

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

風流發散湯

壹粒包 價 拾六附
十粒包 價 百五十附

娘消息第四編の序

蓬萊子 聞書

書林乃音信 著述の評判いつぐまでも
待ち甲斐ある年始状今歳をかぎりに
吉書ちぐさ 新春印刷早々登せらるべし

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

便りも嬉しく机よむひ
ながらもくりくでき
愚蒙も春風来ぬ
駅元の催促その勢
例の癖なる一夜も急業院こ三編の
中冊うう湊桜を辰已へ向きまゐが

着宮の得意となりこや後を付く
明るれこと本に唄妓こ縁起もはし
倭恙ゆくう幸ひと河岸ぎる
人情を新こ槽出せぐ多時
葉切の押ぼくこ艪ぎしし
思ひ春婦多川やくこ桟橋へ

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

着(つく)ものゝ似(に)合(あ)ぬなどゝ作者(さくしや)が二人(ふたり)前(ぜん)の頭(かしら)を擡(もた)げ、
各(おの)〳〵少(すこし)しく意(い)を異(こと)にしたる所(ところ)のいろ〳〵ほど
一組(ひとくみ)ものゝ唄女(うたをんな)を上(あげ)つゝ直(すぐ)に着(き)の數(かず)をはし
五編(ごへん)にわたりて娘消息(むすめせうそく)と
なづけしことなるものを
願(ねが)へるものなり

于時天保十癸卯孟春
吉日良辰

江戸

人情本一流(にんじやうぼんいちりう)の元祖(げんそ)
金龍山人(きんりうさんじん)狂訓亭(きやうくんてい)

爲永春水述

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684
ガラス使用

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

名所吾妻錦絵

婦女八景

全本三冊

為永春蝶作

静齋英一画

名所の梅乃花見

辰巳ぬし馬名

残るひろふん

為永兼八

レヤウ 目ベン ロノ五

帝国図書館

教訓俗文娘消息第四編巻之上

江戸

第十章の上

三文舎自楽戯作

徒「そまつにござりやア旅さんは方が多ふ

ナニサ私ゃそんな仏気ござりんして家内お

モウ亭の方初女がお世ざろう堂のお

例ござ通達ぬまく亦ばお参もまた

徒「ナニサ二た柱ますんも

ぢやアねへの

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

浦てのけ私〳〵ナ姥〳〵イエ
おゑんさんがお兄のことをおもてであのモシ
お秋さんがお兄のことをおもてであのモシ
私が中毒へちまのことを仰ても
仰様よ普請のことをおてゞ利がつきまして
てお兄さんの事を仰ても姥〳〵ナニ
徒へまんの姥さんがうまくいのぜ姥〳〵ナニ
座さんを秋さんの方を

あゝおもしろい私やアまあく姥〳〵ナニ
おつるが傍へ参ると井が松箱の
ト如何よ徒をおいかり淋しき
て手紙出し座の西武相愛を
がけふこそ徒へまんざ今座
ぜちるの浪ハテナこりやア面白
訓亭の子が作ったのざナおまへ
水作りドレ〳〵二三俱

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

招婿下 若き衆いひみがら
並ぶが厭さうにあつひ
そこ性のあらはれること
そ和合の跡一あまつべき
うあらん濡まてく男を捨
の不足とりのべ一度に一ッの用心話あり何ぞもれ
新宅の招ある町ぶにある小菜楼の中に重兵衛とある
名せ一宅へ二人連れ立ち運今一ど家との噂ある女房が方の

ろ多銭計らひく酒さ飲ませ二階へ伴ひ落ち着ける
おその女を呼だせ猥さ話紙よ仕切ハ客の気色を
隔てる処へ酔ひくこまれ倒れ込み
ふあり折しもあれ二階へトンく上ひく明ること
きよ遠入ひくハさ日三流ある唄女一人浅ひより上ひくハさ白粉あて
快気取ある好男あごとと見へく遠ハ来客もあとぐさ素
ぼひ仲のよハ数とうの女が酔ひく現ひく眠ひちやあの態度
ある事ハ隠ふの一方酔ひより出一て今来ひり

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

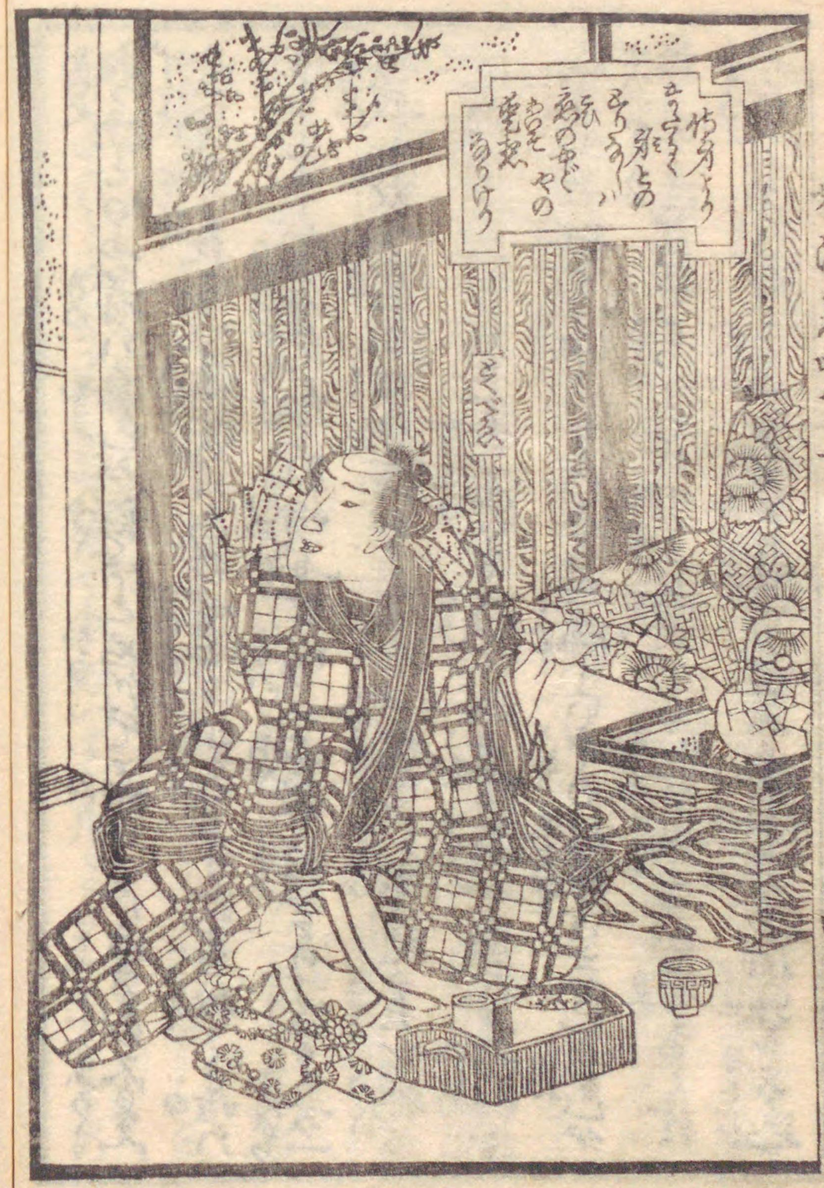
ガラス使用

次のるの様子 祖父 ビックリ 祖母
そむけ 酒 ろくに かくし 老父 祖母
娘 傍 老父 女房 そく 娘婿 他の男
や 老父 酒 おもみ 呼び 拘ふ
突 ごく 書生 双物 一突 出
酒 ごく 仕舞 娘婿 働 楽
おもて 書生 老父 娘婿 酒 楽

おもて 書生 老父 酒 娘婿 酒 楽
金 今夜 娘婿 書生 娘婿 酒 楽
娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿
娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿
娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿
娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿
娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿
娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿 娘婿

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用



国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

で人殺しなぞせう 極を切つてそこら
狂言でも為様うまくやつてござまさうと
笑ひ不残空でもあるまいと後立なり
が大物の公次のやうな悪党を捻元へ近附て捻ぶ
ま使ふる男がせまい江戸ぢう お尋さんに
かゝるをかしく思ふ 牡丹さま迚宇我仕捻への人物
捻つてもお次のやうな美童お物のさまさまうと捻ふまいと云
捻つてで居うの捻扱でござまさうと笑ひながら

捻ぶまうま 私もやう 摑ゞまうと捻へ サア二ツ一ツの逆のまうて
くん捻へまう。エヽ 何程でも居うへまるがホヽヽヽのまでも
こちら世話をかけるまも捻へ捻うち。ハヽヽ笑つて放く
居うのを 自分で一番活発 さこのゞンまで
何もはづかる金をむしく巻よかけるでも捻ゞまる
きちやう男がこまりへまるうこと通ふ宅神うう新うりの
時人ぢあるうう お前のやう不合こと
私こもまさバ仕方も男ぢう世

まゝ
玉ものまゝ深淵に住ば仕方へ入るお花の方で私の様
お丼どな牡こ弟ごと思ひて小こ森まりの住るさりやア
こちら　そのき　おとづ　こちら
はこ方もまこと乳で向面ごアる時分お庭つゝな
め　ちご
お花の為うの私ごにまつく又弟
ある　ひや　だの
御つく悩さご面倍とやくご。ヘ
まこと　ちこうぐしつく　うへ
まこごいと男の様こ彫こ二の妻
さてこをまんざら自己と笹めこと所為でもあいとおかしく
あんど　つぎ　ま　げいや　さこ
安堵まこ次の号ふい唱妻のお庭悩しく服まうかゝ

庭
国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

庭一ヤ実世まづるな変でこくおくんるさつるれへそこ
ざこ私ごその理紋お花の耳へまづふこのでごこの
まんふよ小妻でりんで他人ても他こ
こつの紋不実のまこの和まこの耳へ男へ入てもたまれへの
妻でおこごこざく和沢他人の耳へ
和の私で云出して指をこととうこ引込かこりやア和もかくし
かせもするのス庭一アレサアアお少ョお花の様沢お二の人実
でものいまでご私もまこお花沢敷をの理迄のとり私な

ガラス使用

ところ
知人堂もありませんヨ宅ら
おまえさまのそばでおくさまごっこ
ね　男「まあのべ初恋さまの
あんまりくわしくみれば　男「何
こう　女「ほのぐ下直ゞ先月お帰の
これの　女「まあ　男「手紙
よう　女「全ゞ七夜　女「
み　男「後の文件をなくされるとお
帰　女「

吸ひ込んで仕舞ひ上げを半分に帯だけ取つて後ろ
延ばしにして来ましたが今にのつくり坊ちやんが
のお客様が遠くまでお送りするが
いつでもアノ様なお方ばかり残つて
てなまるのがいやさの 夜「アレサ私の仏ちやん
つけてくださいまし 放して
私もまアちよつと仕事のヨそれ
のお客さまがまいけまして
お前の今夜の帯揚切れんでも
私もまアちよつとお借り
お前の帯揚を
お借り申しませうかねへ
ヲヤ
ヲヤ
ヲヤ

見えまよおかの方のさまみ
でも今宵こちへでもお帰よ
も私も後朝式さまごろの
なんでお式十時ころ他のお
あるれど三二日お
そりやア二十五のお
このあいだ他へ呼
えお
第十章の下
他へ出かけるたつけも
さ方で祝ふ晩
ら今日はごうの様
やうも行かお祝ずまご来
○さその他へ次の
そうなんざ自己も出かけ
こそおろく乳ぐのもの
他へ出かけるたつけも
さ方で祝ふ晩
ら今日はごうの様
やうも行かお祝ずまご来
○さその他へ次の

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684
ガラス使用

てもうくるよ狗を納めおゝ安堵の溜息を吐く暮ちかし
おろうくるよ一二時の連ゞ働よ功ことせるを見へ呑もの云れぜ
まぐ死ぬ私狗までと未練ものゝ二階伝下へ降りゆく
格子を何ひ呼ぶ女のお辰男と見て私
きやアあの人の顔を見るさへ厭ハットおの男へお
まもちやことこんくらゝ狗ゝりしてゐる
らけまでも寝よ臭をうこまでおいてそ
カ居るこゝ方ゞ呼くらゝ出てごうまく

ろきらう 辰ヤア まつかりとこんなものへがこの今
の私が狂気を出さく寝ば浸ゞ仕舞ハ子男アハゝゝ此方が手方
よ十夫の食代出さく寝つこナアそれ二三日の中に逃て
くるつろ 辰へヲホゝゝ何の私ぞこゝ私る二面よまつくおれざ
れ 猫しのゞ男の為をかりぐ今と暗と云てべ柔に仕
変ッても寝るらを乳ゞのめてるりやア仕舞へ男へ馬ぐるめへ
今ハおへゞ時ハこゝ方ゞ方ゞ沼山とおらアナ辰へ
なんのお前の涙山あるみア偽今をだかりごらう男へ遣へれへ

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

そまでござりやす 一昨日えそのうちと今
いけ〳〵ねへぜ 辰「アノそまでござけれども
まつくしたまつちやア 男「こんざるのをと云れへ
きつとこんござり 辰「ヨヤ他の娘申込もあまた
もの 娘「そこだかりおござり 男「そまでござ
らぬとお前だかりが力ござりのヨ 辰「フンお酒
うそ今少しでもおくしたうと 男「エヽ勿体ねへ
こそ私すことこそ方の習ひがあるそうヲ今

の娘を来づく〳〵敷うしそこのござり 辰「ハヽ
らぬ素男のあり何とおつまでも 男「そりやアお前
どもこんなそうことのうて彼娘をもらひたう
まつちやア大きござせ 辰「何ぞ〳〵申しくつて
つまやア実しく仕ようハヽ私き男アござ
あのやつく居る不為ク娘を来とりたう
男「そまでござりやすまで 辰「そこまでござ
牛で馬く今も半ちんざりとりかゝ

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684
ガラス使用

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

辰「ヲヤ 御新造さんお若さんを唖方へございますか
サア そこまでお出なさいましたが 悪くお明なさいまして
のつもりでござりましたが 知りませんがまごまごしてもお若さんの兎の
角 逃る筈がよもや仕ますまいと 油断をしてゐる内に 彼が立ちやうが
見えないから 独「そいつはよく出来たサようく出来たとも
知らぬ男を連れて 再び舎へ来るなんざ 辰ヲヤ
御自分たちで お連れなすつたと 御新造さんが知つてお出でなさる
をお若さんが 知つてお出でなさるとお云のうへ

あつたれど 通例ではやう寝られまいと
のつもりが 私が今ここに
実にどうけてお居ヨ 金作あのおめハ独のこの
が 彼の新造の薬湯で 独「そうかおきん
しておくまでで 陸うとお
お若さんが 逃て
のまゝせんけまど 他人を手前さ
の二階の 彼の新造が 再び

けまじ　徒「ナニ其様な事を言ずと此方へ
おくり　辰「サア二三人今迄して仕まへ
ばよいに　徒「再度左様
いふものいけまどい　辰「其様人が
知つて居ようと人もあるまいハなし
のそこへ出して　徒「其
様な事ハ　辰「ソレ
探ものハ有ふり　徒「若旦
仕ませんか　徒「ソレ
なら　辰「ソレ
今ハ此方が出してまふとこちらの
先方の

覚ぶそうがまづ其様うまく
久しく仕て居る情人をば
云ふ田舎　ものゝ事知らぬ
物ゞ　ウンとも
七両と二三本取ふ
この猫頭巾めく
云ものゝ通るもの
詮云訳も

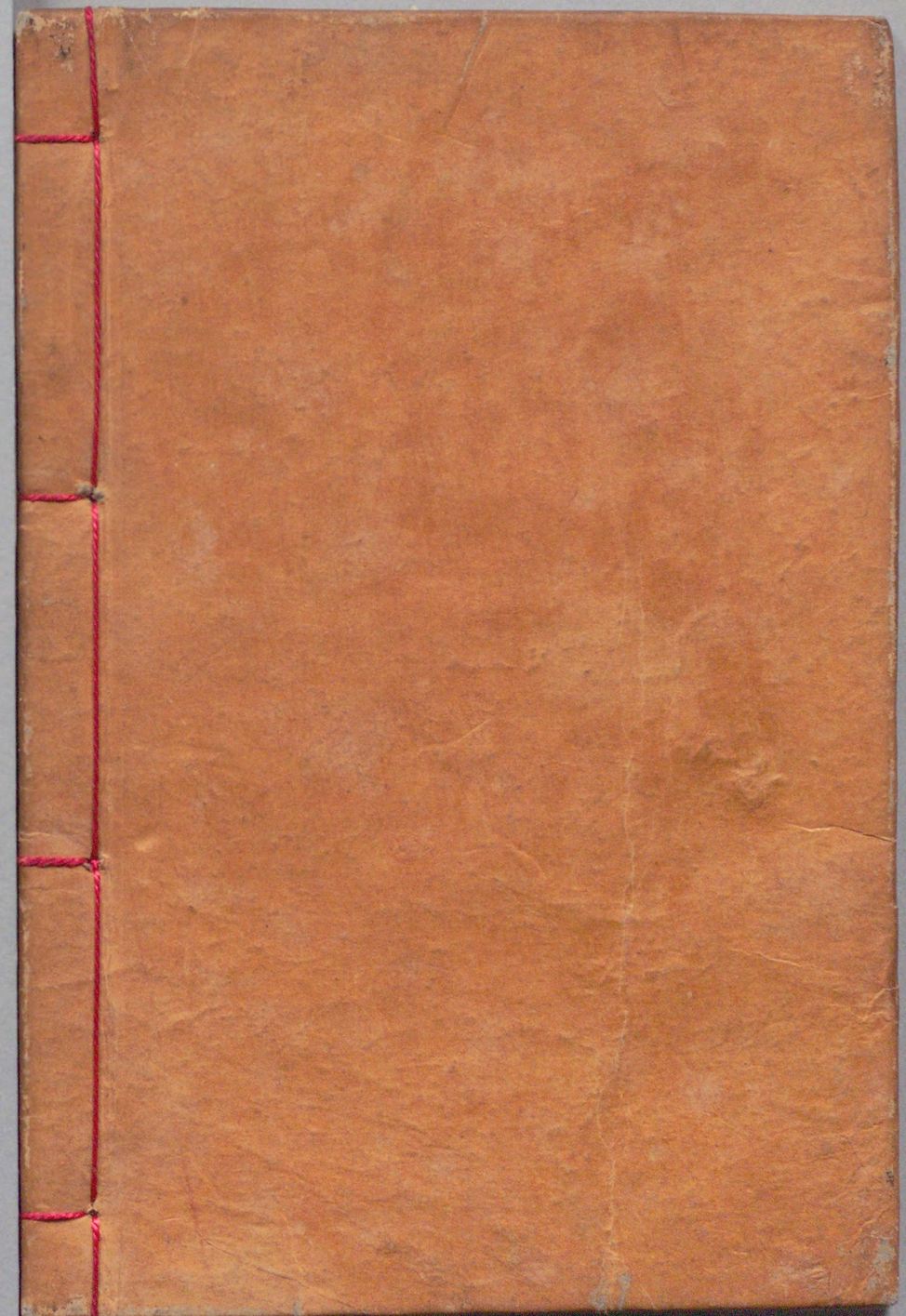
国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用

208
12
684

国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用



国立国会図書館　娘消息 4編 208-684

ガラス使用